

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	長谷川 倫子
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第317号
学位授与年月日	平成25年12月31日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び 横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	団塊世代の音楽受容にみる階層性 —音楽体験の変遷を中心とした分析から—
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 横浜国立大学 准教授 中川克志

論文及び審査結果の要旨

本学位論文は、定年退職の時期を迎えて社会的に注目されている団塊世代を取り上げ、彼らの世代観でもある音楽との関わりを質的および量的に調査し、団塊世代における音楽受容の特徴、団塊世代の階層意識と音楽受容の関連について明らかにしたものである。

研究Ⅰでは、広義の1947～51年生まれ(2009年では1063万4千人)の13名の団塊世代を対象にインタビュー調査が実施された。調査の内容は「子供の頃から現在までの音楽体験」「自分にとって音楽とは何か」「団塊世代について」であり、語りのデータから、概念やカテゴリーを生成する分析ワークシートによる質的な分析を行い、生成された概念やカテゴリーの関係を構造化して結果図が作成された。分析の結果、「人数が多い」が核となり、「競争社会」「格差・階層」「学生運動」などの概念が生成された。人数が多くて「一括り」にされがちな団塊世代であるが、本当は「格差・階層」を感じており、「一括りにされたくない」と感じていた。また、団塊世代の格差・階層意識は音楽における格差意識にも及んでおり、育った環境の違いを音楽に投影したり、学歴などの格差意識で音楽レベルを評価していた。以上のことから、「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか」という問題意識が生成された。

研究Ⅱでは、この問題意識に基づき、子供の頃から現在までを研究Ⅰの結果図に沿って時系列で追っていき、それぞれの時期での音楽受容(音楽聴取頻度や音楽ジャンル嗜好など)と階層意識の関連を中心に量的研究方法により調査・分析が行われた。ここでは、JGSS(日本版 General Social Surveys)の2003年版と2008年版のデータによる二次分析、また、独自に実施した団塊世代を対象にしたインターネット調査2013年版(500人)、必要に応じてインターネット調査2012年版(1000人)によるデータを用いて分析された。JGSS-2003と2008において他世代と比較した結果、団塊世代のみの特徴として、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」に対し「父親の教育年数」や「居住地の市郡規模」が関連し、また、その「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は「階層帰属意識」に関連していた。団塊世代の音楽聴取には父親の影響がみられ、さらにそれが階層帰属意識に繋がっていた。また、演歌を好む割合が、次の断層世代以降激減していたことから、「団塊世代は演歌を好む最後の世代」と考察された。この演歌を好む層は、子供の頃地方に住み、その後大都市に移動した教育年数が短い者に多いことがわかり、団塊世代に多くみられた集団就職の人たちが関係していると推察された。青年期の音楽嗜好は、子供の頃家庭環境に影響されていた。すなわち、親の教育年数は15歳頃の世帯収入レベルに関連し、それが高かった家庭では、父親の音楽聴取頻度が多く、テレビやレコードで音楽をよく聴き、音楽の習い事をしてきた。また音楽の

授業を好み、その後の教育年数も長く、クラシック音楽を好む傾向がみられた。反対に、演歌は、男性で子供の頃地方に住み、教育年数が短く、レコードはあまり聴かず、音楽の習い事もしなかった層が好むという結果であった。このように、青年期の音楽嗜好には明らかな階層性が認められた。

JGSS-2008 では、クラシック音楽とポピュラー音楽は、女性で教育年数が長い層に好まれ、演歌は教育年数が短く世帯年収の低い層に好まれていた。2013 年の調査でも、クラシック音楽と演歌の階層性は顕著であったが、ただ演歌に関しては、高学歴で管理職の男性も好む傾向があり、演歌は仕事上の重要なツールでもあったという側面がみられた。

団塊世代の教育年数において、団塊親世代→団塊世代→団塊子世代と世代間で正の相関がみられた。また、クラシック音楽の好みも教育年数と正の相関を示し、同じように継承されていた。学歴と正統的音楽の好みがそのまま次の世代にも継承されており、ピエール・ブルデューが論ずるところの「文化的再生産」といえた。

団塊世代の退職期 2013 年では、男性は有職者より定年退職者（学歴は高め）の方が階層帰属意識が高く、女性は配偶者の学歴が高い者ほど階層帰属意識が高かった。収入や資産のみでなく、過去のステイタスや配偶者の学歴で自らの階層を意識化することは、団塊世代特有の激しい競争社会で戦い続けてきた男とそれを支えてきた専業主婦である妻の自負という構図であると考えられた。

以上の分析結果から、研究 I で生成された問題意識「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか」は検証されたといえる。さらに、他世代との比較から、「団塊世代は階層意識と音楽受容の関連性が顕著な世代」と指摘できた。

本学位論文は、団塊世代における音楽受容の特徴、団塊世代の階層意識と音楽受容の関連について明らかにしたものである。特に、団塊世代は他の世代に比べて、階層意識と音楽受容の関連性が顕著な世代であるという指摘は学術的にも重要な知見といえる。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして学位の授与に十分であると結論し、審査員は、全員一致して、博士（学術）の学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。